読者の広場

パタゴニアと風

横山 稔
有限会社グレートスピリッツ 社長
東京都渋谷区恵比寿南1－１６－７エビスツイン仁平602号

アルゼンチンの南部、パタゴニア地方は地球上で人類がまだ手をつけていない最後の土地といえるだろう。今でも人口密度は1平方キロあたり１人以下である。１８１６年アルゼンチンがスペインから独立した後もその発展はブエノスアイレスを中心とした北、中部に限られパタゴニア地方は未開発のままずっと残されてきた。２０世紀に入ってから地下資源などパタゴニア地方の豊かさを認識したチリ人が勝手にパタゴニア地方に進出しチリ領になりそうになり、あわてたアルゼンチン政府がやっとパタゴニア地方への移住を奨励し人が住むようになったのである。第２次世界大戦後、ユダヤ人が自分の国を作るときパタゴニアを狙ったが、時のペロン大統領が拒否して結局今のイスラエルになったというエピソードも残されている。

ついでにもうひとつのエピソードを話そう。パタゴニアの国境紛争により隣国チリと険悪な関係になったアルゼンチンはイタリアの造船所にモレノ、リバダビアという２隻の巡洋艦を発注しチリとの戦争に備えていた。ところがローマ法王が出てきて一挙に国境線を決めてくれたのでこの船の必要性が薄れ、１９０３年、当時ロシアのバルチック艦隊との戦いを迫られていた日本にこの２隻を譲渡してくれたのである。日本海海戦においてこの２隻は、日進､春日と名前を変えて大活躍し日本の勝利に大いに貢献したのである。これは日本とアルゼンチンの関係者が必ずだす話題であって、その友好関係は今でもゆるぎないものとなっている。１００年前の時代に、移民者で構成された国家であるアルゼンチンが白人のロシアに味方せず、有色人種の日本に味方したのである。そのことに当時から今につながるアルゼンチンという国のフィロソフィーが出ているのではないだろうか。ちなみにブエノスアイレスのアルゼンチン海軍大学の正面には東郷平八郎元帥の、横須賀の防衛大学にはアルゼンチン独立の父、サンマーチン将軍のそれぞれ銅像が立っていることを付記しておきたい。

さて本題に入ろう。パタゴニアの名前は１５２０年世界一周となる航海の途中でこの地で一冬を過ごしたマゼランによって名付けられた。彼はこの地で大きな（ゴーネス）足（パタ）を持つ大男たちと出会い、かれらをパタゴーネス（大足族）と呼び、パタゴーネスの住むところと言う意味でこの地をパタゴニアと名付けたのである。人を疑うことを知らず気は優しく力持ちの典型で、テウエルチェ（ＴEHUELCHES）族と呼ばれたこの原住民は文字を持たず最後の一人が１９４０年で絶滅したといわれるが、その音声語が録音されて残っている。それを翻訳すると南から吹く風のことをウアジェン（HUAYEN）と言って盛んにこの言葉をつかっているという。大昔から風が吹いていた証拠である。

余談になるがこれから水素エネルギー協会が進めようとしているパタゴニア風力水素プロジェクトにこの名前をつけようという動きが現地ではある。ＨUAYEN PROJECT となる。これに太陽の子（日本人はアルゼンチンでは Los Hijos del Sol－太陽の子―と呼ばれている）が参加すればＨUAYEN―YAMATO PROJECT となる。

１５１９年８月スペインのセビーリヤを出港したマゼランは大西洋を渡り、ブラジルの沿岸を南下し、翌年２月パタゴニア、バルデス半島のサン　マテイアス湾に到達した。それまでいくつも出会ったインドに抜ける海峡のように見えた入江は奥まで探検してみるとすべて湾か川であることが分かり落胆し、そうこうしているうちに嵐は日ごとにつのり、波も荒れ狂ってくる。結局マゼランはそこから更に南のサン　フリアンの入江で、南半球では冬に向かう４月、越冬することを決めた。それまでのパタゴニア沖での２ヶ月間は毎日が風との戦いであった。マゼランが我々に証明してくれたことは、地球は円くて一周すれば出発点に戻れるということと、パタゴニア地方には５００年前から強い風が吹いていたと言うことである。

その後、今から１７０年ほど前にダーウインがパタゴニア地方を探検し［ビーグル号航海記］を書いている。

ダーウインが主に探検したのはビーグル海峡の名前で残っているパタゴニア最南端に近い海峡であり、そこは海から屹立する山が風をさえぎり、鳥やアザラシなど動物の天国なのである。それより北にある、風だけが吹くパタゴニア不毛地帯を彼は「呪いを受けた土地」とまで書いている。つまりここでもパタゴニアには動植物の生存をおびやかすほどの強い風が吹いていたということが分かる。実際、風が土を掘り起こし植物を吹き飛ばすために広大なパタゴニアが風だけが吹く不毛地帯になっていったのである。今でも人間の住むところは水の多いアンデス山脈のふもとか、大河が海に注ぐ河口近辺だけである。

わが日本にもパタゴニアの未踏峰アレナーレス山に初登頂し、「パタゴニア探検記」（岩波新書６８２，１９６８年）を書いた高木正孝氏がいる。同氏は神戸大学山岳部でヨーロッパアルプスやヒマラヤなどにも遠征しているが、同書の「パタゴニア風の洗礼だ」の項で次のように書いている。「２月２６日、水曜、雨はやんだがものすごい風だ。いよいよパタゴニア風の洗礼だ。テントは補強工作のおかげでとばされない。しかし外にだしておいた食器のアルミの鍋、湯わかし、おわんやお皿などは木の葉のように飛びちってゆく。風には息がある。風はサウス・コルをこして、太平洋側から吹いてくる。」そういう風が吹く不毛地帯のパタゴニアでも、彼はまた「さらばパタゴニア」の項では「何か、この美しいパタゴニアが去りがたい。しかしヒマラヤにはこんなことはなかったはずだ。いったいわたしはどうしたというのだろうか。アルプスには山と人がいた。ひとっこ一人いないこのパタゴニアで、わかれがこんなに悲しいのは、自然のあまりの美しさのためかも知れない。」とパタゴニアの魅力を書きつづっている。

さらに作家の椎名誠氏がパタゴニアを旅行して１９８７年、旅行記「パタゴニア」を書いているが（情報センター出版局発行）その副題が「パタゴニア、あるいは風とタンポポの物語」となっている。このようにパタゴニアと風とは同義語みたいなものであることがお分かりになるでしょう。

世界中どこでも偏西風といって風はだいたい西から東へと吹くことが多いが、パタゴニアのそれは極端である。ほとんど一年中西風が吹き風向きが変わることがない。これは偏西風に加えて、西の太平洋に寒流が、東の大西洋に暖流があるために東の空気が上昇しそこに冷たい西風が吹きこむといわれている。さらには東側に大きく広がるパタゴニア砂漠地帯が太陽光で熱せられ上昇したところに西側のアンデス山脈から冷たい風が吹きおろす、つまりこれら３つの要素が重なってコンスタントに西風が吹くといわれている。

時代が変わり、人間が住むのに妨害となっていたパタゴニアの強風がいまや新たなエネルギー源として脚光を浴びだした。厳寒で人が住みくいといわれたパタゴニアには地球温暖化で水位が上がり住めなくなった南太平洋の島国の人たちが移住してくるであろう。実際最近急激に人口が増えているという。パタゴニアの時代はすぐそこまで来ている。そして化石燃料を燃やされて疲弊した地球を救うのは、このパタゴニアであることは間違いないであろう。

最後に絶滅したパタゴニアの原住民、テウエルチェ族が使っていた言葉のいくつかを日本語に翻訳してみたい。大男で善良で平和を好みパタゴニアの本来の持ち主であったテウエルチェ族を忘れないために。

光　＝　ペロン（PELON）
火　＝　イアイケ（IAIQUE）
顔　＝　アヘ（AGE）
心臓＝　へ　（JEJ）
男　＝　カアデン（KAADEN）
高い＝　アウカ（AUCA）
馬　＝　ガグイ（GAGUI）
犬　＝　グアチェン（GUACHEN）
鶏　＝　アチャオ（ACHAO）
隼　＝　キリケ（QUILILQUE）
南風＝　ウアジェン（HUAYEN）

写真１　マゼラン海峡

写真２　鯨

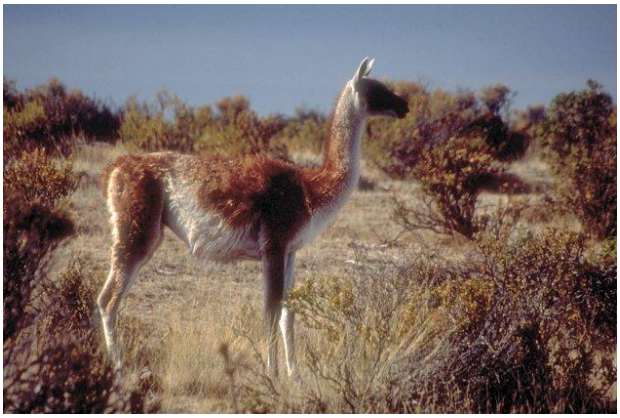

写真３　グアナコ

写真４　ペンギン

写真５　氷河と草原

写真提供：アルゼンチン政府観光局